

旭川のポロメムとポンメム：③

地図①は、松浦武四郎が、安政六年（一八五九年）に描いた『東西蝦夷山川地理取調図』以後、『松浦図』と略記するの旭川市中心部周辺部分図である。図中の「H」印は、家屋あるいは、コタンを表し、実線（原図は朱線）は、安政五年（一八五八年）の松浦武四郎の歩行ルートを表している。

地図①では、石狩川は、「チカフニ（近文）山」から、「ウシ、ヘツブト」（牛朱別川）川口まで、忠別川は、フシコヘツ（フシコチクヘツ）↓現・ポン川）までが描かれている。

地図②は、大正五年測図、大正八年発行の『五万分一地形図―旭川』である。この地図に、前回紹介した、明治三十一年製版の『北海道複製五万分一図』に掲載されて

いた、「ポロメム」と「ポンメム」を加えた。地図①の『松浦図』から、石狩川右岸の「ポロメム」と「ポンメム」には、人家やコタンが無かったことが明白である。

さて、地図①の『松浦図』に記載はないが、安政四年（一八五七年）に旭川を調査した時の『再葺石狩日誌』には、石狩川の左岸に、「ポロメム」（表記は「ホロメン」と「ポンメム」（表記は「ホンメン」）が記載されている。今回は、地図②の大正八年発行の『五万分一地形図―旭川』で見にく。昭和六年に、牛朱別川が、旭橋の袂に切の替えとなるまでは、このような流路であった。

■印は、地図①の「大番屋」があった位置。

置。★印は、亀吉島の名称のもとになった旭川の和人定住者の最初となった鈴木亀蔵の旧居があった場所。亀吉島、亀吉川とも

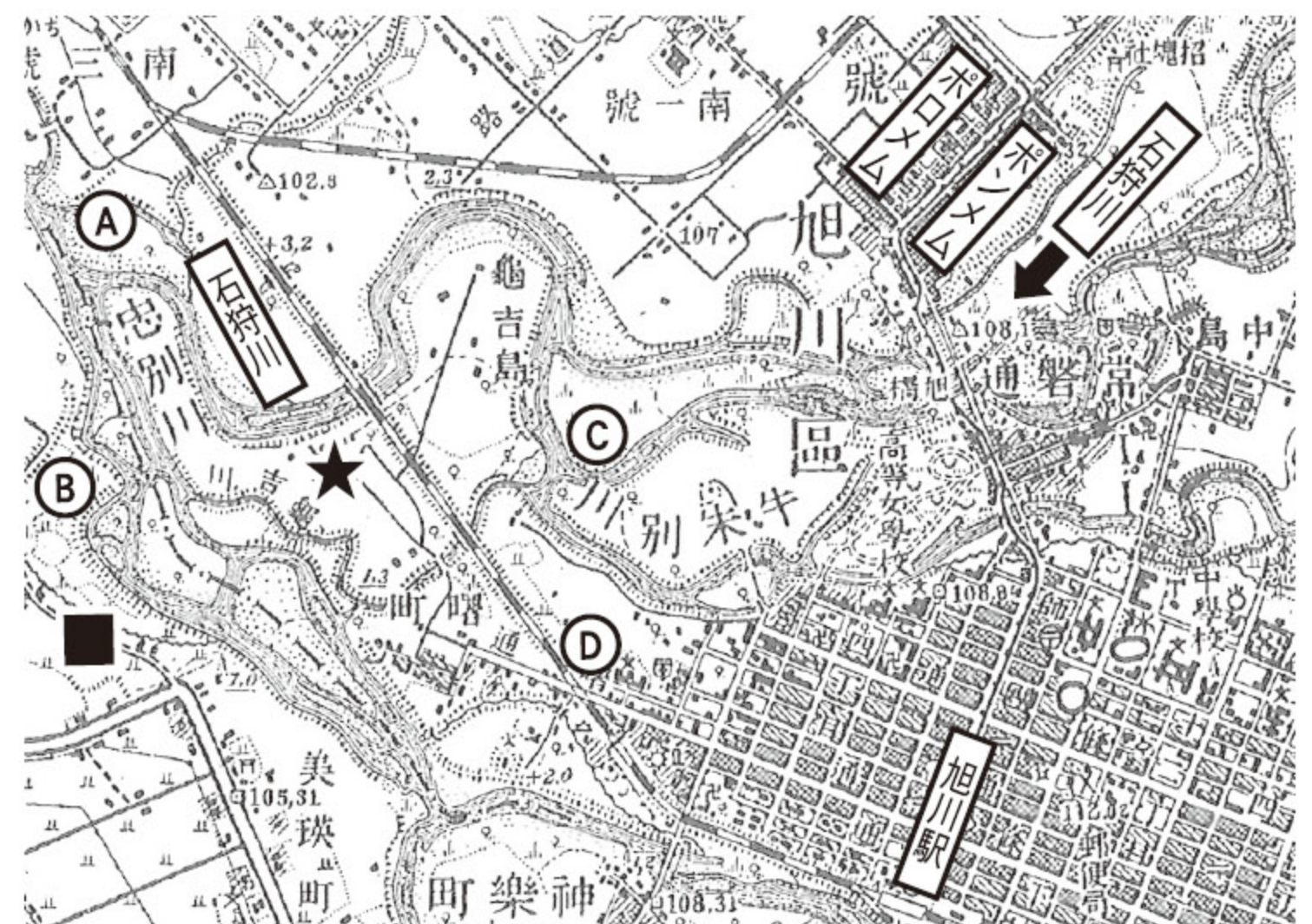
に、「亀は、旧字体の「龜」が用いられている。

安政四年（一八五七年）五月二十六日に、松浦武四郎がカムイコタンから、忠別川の■印の「大番屋」に到着する時のアイヌ語地名を石狩川と忠別川の合流点のA地点から読み解いていく。

① Aへタヌ（petanu）川の二股（此処二股也。左本川（註）石狩川、右の方チユクベツフト（註）忠別川川口也。凡其フト（註）フトウputu―支流が本流に合流する所）の幅三十間（約五十四メートル）も有るべし。

② Bメムフト（ポロメムフトウ（poro-mem-putu）ポロメムの忠別川との合流点）左の方川幅凡十間（約十八メートル）計、遅流（ほかり）してふかし。此上はシヘ

地図② 大正8年5万分1図



ツ（si-pet 真の川）本流（石狩川）に通じるよし也。

松浦武四郎は、その後、美瑛川・忠別川踏査後に、石狩川上流探査に出発する。■印の「大番屋」から忠別川を下り、Aへタヌから石狩川を遡り、C地点で次のように記述する。

◎ホロメン（poro-mem）大きい・古川―右の方相応の川に成るなり。此下なるフト（忠別川との合流点）はチクベツ番屋の下え出るよし也。

地図②で確認すると、CからBまでの川が、すなわち、「亀吉川」が、「ポロメム」（poro-mem）であることが判明する。

松浦武四郎は、Cホロメンから少し上りて、Dホンメン（pon-mem）小さい・古川―右の方小川浅し。底小石なり。其の間に人家多し。

松浦武四郎は、ここに八軒の人家があることを明記する。地図①の「メム」で、松浦武四郎は、ここで重要な記録を残した。次回は、この「メム」を紹介する。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

151

高橋 基



地図① 「東西蝦夷山川地理取調図」

※毎月第1週号に掲載します